

# 5.30 リッダ闘争 47 周年記念集会

奥平・安田・檜森・丸岡・日高そして若松

大道寺すべての戦い途上で倒れた同志追悼

☆☆

## <プログラム>

- ・開催にあたって
- ・講演 廣瀬 純氏 龍谷大学経営学部教授  
国際的な民衆運動が意味するもの(仮題)
- ・2019年5.30 声明(案)
- ・47周年記念へのメッセージ  
岡本公三・PFLP・重信房子
- ・各地域・戦線からのアピール

2019・5・26

オリオンの会

<https://orionstar.jimdo.com/>

<http://orion530.blog.jp/>

## 講演 廣瀬 純氏 龍谷大学経営学部教授

### 国際的な民衆運動が意味するもの(仮題)

現代思想・映画批評 アンスティチュ・フランセ東京 映画講座〈シネ・ディマンシュ!〉 <http://cinedimanche.web.fc2.com>

著書『シネマの大義』『資本の専制、奴隷の叛逆』『暴力階級とは何か』『絶望論』『シネキャピタル』『蜂起とともに愛が始まる』『アントニオ・ネグリ』『美味しい料理の哲学』など。

週刊金曜日に不定期で「自由と創造のためのレッスン」連載

#### 最近の論考

- ・週刊金曜日 自由と創造のためのレッスン(第 82 回)ロボットは労働から雇用を切断する
- ・自由と創造のためのレッスン(第 81 回)黄色いベスト運動とは何か(2)
- ・自由と創造のためのレッスン(第 80 回)黄色いベスト運動とは何か(1)
- ・自由と創造のためのレッスン(第 79 回)ブラジルに誕生したのはいかなる政権か(2)
- ・ヨーロッパに幽霊が出ている：金融資本と移民 (特集 政治を変革する思想と方法)  
掲載誌 世界 (917) 2019-02 p.131-139 添付参考資料
- ・自由と創造のためのレッスン(第 78 回)ブラジルに誕生したのはいかなる政権か(2)
- ・自由と創造のためのレッスン(第 77 回)ブラジルに誕生したのはいかなる政権か(1)
- ・自由と創造のためのレッスン(第 76 回)「68 年」は新自由主義革命だったのか(1)
- ・自由と創造のためのレッスン(第 75 回)「決壊」を実現するのはつねに「人民」である：
- ・自由と創造のためのレッスン(第 74 回)「ブラジル」と「日本人」
- ・自由と創造のためのレッスン(第 73 回)左派政権下ポルトガルでの住宅要求運動(2)
- ・自由と創造のためのレッスン(第 72 回)左派政権下ポルトガルでの住宅要求運動(1)
- ・自由と創造のためのレッスン(第 71 回)ポルトガルの奇跡?

## <MEMO>

5・30 リッダ闘争 47 周年記念声明

新たな革命の継続へ向けて

『今こそ、国際主義の復権を！』

2019. 5. 26 オリオンの会

○はじめに

今から 47 年前の 1972 年 5 月 30 日、若い日本人戦士 3 人が、イスラエルの空軍基地であり国際空港だったリッダ空港 (=現テルアビブ空港) を襲撃した。3 戦士に襲撃されて慌てふためき、無差別射撃をする空港警備隊との銃撃戦で、イスラエルの核爆弾製造の父と呼ばれた博士を含む 130 人以上の死傷者が出た。イスラエルと米国は、直ちに「冷血の国際テロ行動！」と激しい非難の声を上げ、日本政府は、連赤事件直後の「過激派取り締まり」強化を目論んでそれに和し、「冷血の過激派暴力犯罪」というキャンペーンを大々的に繰り広げた。

その一方、中東アラブ世界では民衆は、イスラエルのパレスチナ人虐殺テロに反撃したと歓喜し、「日本人がアラブ・パレスチナ解放のために命を捧げた！殉教者に祝福を！」と各国の主要な都市では大デモが巻き起こった。アラブ連盟の中では 7 か国の政府が「パレスチナ解放の大義を実行したリッダ闘争を支持する」と公式表明した。

しかし、アラブ大衆と政府の支持表明は、日本の人々には全くと言っていいほど伝わらなかった。いや、全く無視されたと言った方が正確だ。当時の中東特派員たちが闘争やその後の中東状況を速報で送っても、米国 - 日本政府、そして警察権力と組んだ新聞や TV のデスクは、それらを悉く握りつぶした。アラブと言えば日本人にとっては「石油資源地域」、日本と言えばアラブの人々にとっては「空手と神風とトランジスタラジオ」というくらいにしか周知されていなかった時代であり、このリッダ闘争の評価を皮切りに、相互の地域を覆っていた政治・経済・社会問題が徐々に認知され始める時代だった。

従って、その後も、リッダ闘争についての国際的なレベルでの評価と、日本国内での評価は全く相反するままに放置されて来た。日本で市販されている地図には、「イスラエル」の名前は書かれていても、「パレスチナ」の名前は書かれていなかった。そんな時代から今日まで、欧米の中東支配の野望は、時々の組み合わせを代えながらも、ペンタゴンが新たな国境シミュレーションを勝手に作った「中東民主化と自由市場化計画」のように、その悪辣さを連綿と維持している。その間に、アラブの人々は百万を超える難民に追いやられ、虐殺され、故郷を奪われたままだ。

これは、IS のファナティックな主張ではない。現状は、パレスチナだけではなく、湾岸戦争に始まった地域全体の分断と焼け野原化が、イラク、シリアを覆い、

イエメンの悲惨を産み、今日も日々、人々は殺され続けているというのが事実だ。  
私たちオリオンの会は、一昨年以来、リッダ闘争の意義と実践的な評価の見直し総括を、国際主義による連帯実践の経験総括として学習して来た。

リッダ闘争は第三次中東戦争以降のパレスチナ革命の戦略差異が鮮明になるなかで民族自決権の高揚の契機の一つとなった。それはまた、アラブ人民によるイスラエルとアメリカの中東支配に対する反撃の狼煙ともなり、ベトナムの解放戦争への国際的な援護ともなった。こうした闘いを通して各国各民族の革命組織の国際的な共同が大きく前進した。

日本の階級闘争に対しては、連合赤軍事件という革命組織自身のもたらした敗北故に、運動としての波及力をほとんどもつことができなかつたが、少なくともパレスチナ問題を広め、日本におけるパレスチナ連帯運動の火をともしたという役割は果たしたと言えよう。つまり国際連帯運動の一つの実践的なあり方を示した。それ故に、日本の人々にアラブへ結集する契機をつくりだした。

米州、オセアニア諸国。世界の3分の1ほどを「移民」国が占めている。  
中南米の特徴は「国境を越える」革命闘争が闘われたことだ。「全域がヨーロッパ資本の支配下にある」としたゲバラ、カストロの「汎米州革命」路線が土台にある。

60年代ブラジルでは反帝社会主義者がすべて「ナセル主義者」と報じられていた。彼らはアラブ人ではない。「民族（ナシオン）社会主義」と観られたからだ。この場合の「ナシオン」とは「植民地民衆」のような意になる。「ブラジル民族」は存在せず、「ジャポネス（日本人）」「アレマオ（ドイツ人）」などと出身国で呼ばれる。国内で「ブラジル人」と呼ばれているのは黒人や先住民インジオと混血した子孫たちだ。混血は劣等との感情が長い間国民を縛っていた。移民子弟たちは母国との二重国籍や多重国籍が多い。3世、4世と代を経るに従い、母国への帰属意識は弱まる傾向にある。

60年代末、反米反軍政都市ゲリラ闘争に100人を超える日本移民子弟が参加し、数十人が戦死したと言われている。

1990年代に海外在住邦人は100万人を超え、2018年10月1日現在の集計での総数は、135万人である。

国内在住外国人も増加を続け歴史的経緯がある在日韓国・朝鮮人を加えれば2018年末時点の在留外国人数が17年末から7%増の273万1093人で、過去最多となったと発表した。

国際結婚も増加を続け、日本国籍を取得した外人、その子弟が各地に見られるようになった。

UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）によると過去最高の推計7144万人に達した

とされ、2017 年末時点で家を追われた人の数は 6,850 万人。これはフランスの総人口に匹敵し、2 秒に 1 人、1 日 44,400 人が紛争や迫害、そして暴力等により避難を余儀なくされたことになる。難民問題は欧米のみならず世界的に政治状況を底流から変えつつある。

移住、難民、ビジネス、観光などで世界大で見ると 1 日に百万人が国境を越えて移動しているという説明もある。

このような大移動時代での「プロレタリア国際主義」はより実践的、実際の、積極的で日常的なものにならざるを得ない。

「国際主義」とは現象的には、他国組織、他国人運動との交流、連携などであり、イデオロギー的には「被植民地」「少数者」「被抑圧者」などの側に視点を置き、国際資本に対して共同して戦うこと。実践的には戦争政策を推進する自国政権を打倒し、他国革命運動に自己犠牲的な支援を行う事とまとめることができるが、これらの文言より先に実際に戦われてきた歴史上の「国際主義」闘争を知ることがまず問われてはいないだろうか。

国際主義の復権に向けた私たちの闘いは、まだ再開されたばかりであり、幾多の闘いの総括をも集約し、今後の発展をめざそうとしている。

勿論、その中でリッダ闘争を捉え返して、新たな国際主義実践の発展を導くものとしていこう。

### ○ 世界レベルで蠢動する民衆の闘いに連帯して行こう！

グローバルゼーション（国際金融資本主義）の民衆に対する搾取・抑圧は極限にまで拡張し、最早、世界中を瀕死の状況にまで追い詰めている。更には、米中貿易摩擦の拡大、石油資源を巡る米国の覇権維持に向けたイランやベネズエラへの旧くて新しい経済封鎖と陰謀策動など、金融資本に踊らされたトランプ米大統領の世界再編への妄動が世界を覆っている。

英国の離脱に始まった EU 域内に広がる「自国第 1 主義」の政治潮流の登場もまた、その危機状況への保守防衛スローガンと一体となって、最早、欧米の人権主義を第 1 とした国際政治体制の欺瞞が浮かび上がり、国連を筆頭に死に体化しようとしている。むき出しの自国第 1 主義の前では、人権擁護を訴える運動は僻地の路地に追い込められつつある。

その危機状況の矛盾を最初に押し付けられるのは、いつもの通りだ。各国そして各地の人々は、一握りの金融資本家から貧困と差別の監獄の中に放り込まれ、人権破壊だけではなく、生存権すら脅かされている。そんな人々が、遂に我慢の限界を訴えて、世界中で「生きるために」動き始めている。

パレスチナでは、昨年来、経済封鎖で「青空監獄」の中で病苦と飢餓で苦しめられ続けて来た 200 万の人々が立ち上がって「グレイトリターン・マーチ」（＝祖国への帰還大行進）を開始した。死者 200 人以上と負傷者 2 万人以上を出しながら

も、イスラエルに占領され続ける祖国への帰還を実現するまでイスラエル政府と軍の弾圧を乗り越える決意を示している。中南米でスタートした貧困飢餓と病苦から逃れて生存を求める「大行進」の波は米国の移民排斥の象徴であるトランプ流の「国境壁」では解決できないレベルに達している。反難民・反移民を声高に叫ぶEU域内の安全防衛策の陰で、大多数の労働者と広く地域住民を抑圧する新自由主義の信奉者マクロン仏政権の増税策に対しては、生活権を守ろうとするイエローベスト運動が毎週続き、拡大しようとしている。この窮状脱出の人々の波は、世界中で止まらないだろう。

これらの民衆蜂起の共通点は、国家間の便宜的な取り決め（2国家間合意など）が本質的には反民主・反人権を土台に成立して来たものであることを暴露し始めている。従って、生存権を主張する運動の前では、国家体制が揺らがざるを得ない現実がより明らかになって来ている。

まさに、世界中の人々は、グローバリゼーションと金融資本主義が招いた強収奪で生存権すら脅かされている現実の変革を求め、訴えているのである。

私たちオリオンの会は、民衆が主導するこの蜂起開始の現状を注目し、これらの運動は、かつて「全世界の労働者よ、団結せよ！」のスローガンで連帯し合った国際主義の闘いの変遷と敗北と、再編への努力の欠如が招いた結果として受け止め、それぞれの持ち場から再度運動化を、今から明日へ、自己変革をバネにした闘いとして開始して行こう。

#### ○ 人々と共に闘う実践方向の強化を！

日本での闘いは、安倍政権—日本会議による「自国第一主義—美しい日本をとり戻そう！」が憲法改正を基軸に動いている。それは天皇を元首として、自衛隊を軍隊化し=9条改悪、「緊急事態」を新設することによって権力の強化と独占を強める「復古的自国第一主義」である。私たちは、改憲強行を阻止する必要を初め、全く同じレベルで進められている沖縄・辺野古の米軍基地新設の阻止、新元号〜オリンピックの進める祝祭フィーバーの欺瞞性の暴露、原発再稼働—福島被災者の棄民化・差別などを民衆の闘いの共通軸としていかなければならない。

生産と所有の分離は、隷従と貧困問題を増幅し、非正規労働者、相対的過剰人口を移民労働者、家事労働者も含めて増加させ、裁量労働の名目で死ぬまで働かされる正規労働者、シルバー世代も含めてアンダークラスを形成する。資本主義のままでは生きていけないこうした人々は、<新しい社会>を創造するために、共有・協同・共生を求めて世界的な胎動を開始している。イギリスのコービン、フランスの「夜立ち上がれ」「黄色いベスト運動」、スペインのポデモス、ギリシアのシリザ、そしてアメリカのサンダースなどである。左翼ポピュリズムといわれようと、右翼ポピュリズムの「自国第一主義」と明確に対峙している。「自国第一主義」と対峙するためには国境を越えて新時代を切り開いていく政治勢力と国際主義の視野に

立った連帯行動を準備していかなければならない。

そうした共同行動の試みはすでに始まっている。日本においては沖縄、原発、貧困などに対して敏感に共同行動が日夜展開されている。行政の圧迫—生活の隅々までコントロールし始めた悪政との闘いは、保育園、老後生活、#METOO、LGBT など社会革命分野を形成している。さらに情報化社会において民衆のネットワークを活用し、支配階級のフェイク・嘘とねつ造を暴き、宣伝・煽動・暴露の民衆の武器にしていこう。

老若の世代間の断絶剥がれや価値観のずれや感性・表現の違いを多様性と捉えて、人々と共に闘い続ける作風を身につけ、最後まで新たな革命の道を邁進していきたい。

5・30リッダ闘争47周年記念集会へのメッセージ

2019. 5. 30. 岡本公三

5・30 47周年を迎えるに当たって、記念のメッセージを述べたいと思います。

今年は、3月初めから体調をくずして入院し、筆が良く回りません。

最近、身近で起きた事と言えば、天皇の退位の儀、上皇への移行、平成から令和への移行、という一連の行事があります。

新年号になった今からは、身を引き締めて毎日を送って行きたいと思います。また、オリンピックがもうそこまで来たかと思うと、身近に思えてなりません。

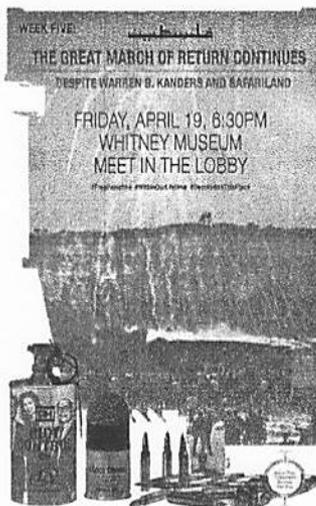
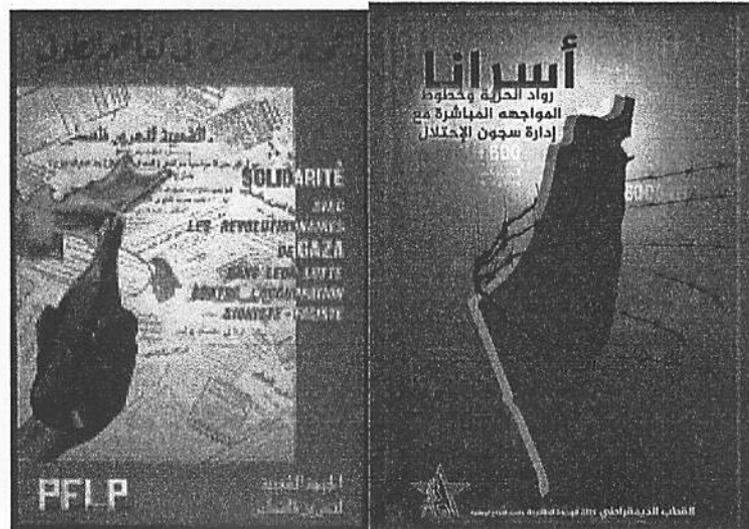
年号が平成から令和に変わり、日本の世の中も様々に変わりそうです。

昭和生まれの私にとって、昭和は未だ身近に感じられます。

4年に一度のオリンピックは、世界を激動させる出来事です。

日本も、東京オリンピックを機に、世界に前進できるように、と願っています。

以上



リベラシオンの HP にアクセスされた皆さんへ

1972年5月30日イスラエル軍に囚われた岡本公三さんは、軍事法廷で終身刑を宣告され、イスラエル軍保安部の想像を絶する報復と情報収集のための攻撃に晒され続けました。強制自白を引き出すための拷問は国際条約を無視した激しさで、なおかつ長期に渡る拘禁生活のために、彼の心身は破壊され統合失調症の病状を呈しました。1985年イスラエルは、国際赤十字の仲介でパレスチナの獄中者とパイロットの「捕虜交換」に応じ、岡本公三さんをはじめ多数のパレスチナ・アラブの戦士たちはレバノンにもどりました。

その後仲間たちと、リハビリ生活を始めました。しかし、1997年、生活を共にしていた日本赤軍5人が日本政府の意向を受けたレバノン国家保安局に逮捕されました。岡本公三さんを除く4人は強制送還される事態になりましたが、その中で彼だけは、レバノン民衆の送還阻止の抗議行動と法曹界の尽力で一事不再理を法的根拠とし、また、戦争捕虜の交換で釈放されたことが法的に確認され、レバノン当局に「アラブの解放闘争の英雄」として正式に政治亡命が認められ、今日に至っています。

現在の彼のリハビリ療養生活は、機会あるごとにレバノン政府に圧力をかけている日本政府の動きに脅かされています。この動きを注視し、日本政府が「身柄拘束」の挙に出ないように監視していかなくてはなりません。

#### ★岡本公三さんの現状

現在、彼が滞在する地域では、シリア内戦激化の影響で、様々な諸組織との間で戦闘が頻発しています。そしてそれにつけ入るようにイスラエルのたび重なるガザ攻撃や虐殺行動が引き続いています。

その様な情勢下でも、PFLPの同志的な協働者たちの支援で、彼の闘病・生活体制は維持されています。

その彼の安全を支えているのは、日本人三戦士たちのリッダ闘争から根付いてきた日本とアラブ民衆の揺るぎない連帯意識です。

彼の闘病・生活体制が維持できているもう一つの要素は、そのアラブの民衆意識を反映してレバノン政府が初めて認めた「政治亡命」を維持する立場を継続しているからです。

岡本さん自身の健康管理は定期健診などで、統合失調症の症状や他の病についての治療は、現地の医師を含めたサポート体制が確立されています。最も大切な闘病・生活の介助協働者との関係も、担当者の人間的な誠実さで信頼関係が築かれています。

しかし70歳を超えた岡本さんは年齢に起因する特有の疾病も見受けられます。現地での闘病・生活の介助協働者とはアラビア語での意思疎通になり、極めて寡黙な日常を過ごしていると言えます。日本語による会話や生活の機微を共にする仲間が必要とされていることは今も変わりはありません。それは精神疾患や高齢者特有の疾病を改善する大きなカギとなるからです。

今回の集会に寄せられた岡本さんのメッセージは明らかに我々にとっては容認できない政治内容が孕んでいますが上記に述べたような過酷な環境下で5.30という期日までに寄せられたメッセージでもありそのまま全文掲載することといたしました。

今、岡本さんの闘病・生活を維持するために問われているのは

- 生活維持のための費用と物資購入の費用
- ボランティアとしての訪問団
- 日本政府の姑息な岡本さんの送還要求の阻止 です。

世界はいま、多くの大儀ある「民衆の闘い」「民族の闘い」を「テロリズム」として一刀両断にしています。岡本さんが担ったリッジ闘争もまた、しかりです。今一度闘いの全貌を考えてみませんか。

オリオンの会 <https://orionstarjimdo.com/>

**Popular Front for Liberation Of  
Palestine  
Lebanon**



**الجبهة الشعبية لتحرير فلسطين  
فرع لبنان**

---

Comrades in the Japanese Red Army,

Revolution and struggle salute.

On the morning of 30/5/1972, three heroes from the Japanese Red Army carried out a brave operation in the Lod Airport, in Occupied Palestine.

The comrades wrote the highest and most exquisite epics of sacrifice and loyalty, resulting in the martyrdom of two comrades and the wounding and capturing of the third.

The operation came to prove the false "Israeli" claims of safety and security, and that the resistance continues against the Imperialistic bogey led by the United States of America and its foster child "Israel" in the entire wide globe. It also came to prove that the Palestinian cause is not that of the Palestinian people alone but that of all the free people of the world, affirming the International solidarity against the common enemy that is seeking to abduct and coerce the oppressed peoples.

The operation was a beacon of light in the history of the struggle with the Zionist movement, and today, 47 years after the operation, each of Yasuyuki Yasuda "Salah," Suyoshi Okudaira "Bassem," and Kozo Okamoto "Ahmad will remain stars shining in the skies of Palestine.

All gratitude and respect to our comrades in the Japanese Red Army, our comrades in this journey.

Glory and immortality to our martyrs.

Victory to the peoples who fight for freedom and liberation.

The Popular Front for the Liberation of Palestine

(和訳) P声明-530四七周年

PFLP・レバノン支部から

日本赤軍の同志たちへ

革命と闘争 万歳

1972年5月30日の朝、日本赤軍の英雄兵士3人は、被占領地パレスチナのロッド空港で勇敢な作戦を実行した。

その同志たちは、2人の英雄は戦死し3人目は負傷して逮捕されるという、最高度の犠牲と忠誠の消し難い叙事詩を書き記した。

この作戦は、“イスラエル”の安全と保安維持が偽物であることを証明し、更には、抵抗闘争が米国に率いられた飼い犬“イスラエル”の帝国主義同盟に対して継続されることを示した。その上、パレスチナ問題がパレスチナの民衆だけのものではなく、全世界の解放を求める人々のものであることを示し、抑圧された民衆を更に虐殺し威圧する共通の敵に対する国際連帯に確証を与えた。

この作戦は、シオニスト運動との闘争の歴史における光り輝く指標となり、作戦から47年後の今日でも、安田サーラハ安之、奥平バーシム剛士、そして岡本アハマト公三は、パレスチナの空に輝く星として残っている。

この闘争の旅を共にした日本赤軍の同志たちへ、全面的な感謝と敬愛を！

我が闘争の犠牲者たちに、不滅の栄光を！

## ナクバの5月パレスチナ連帯を込めて

重信房子

1948年のあのナクバの5月から71年目の5月、そしてまた、リッダ闘争から47年目の5月を迎えています。今、パレスチナは再びナクバの危機に直面しています。いやずっとナクバの危機の中にあると言っても過言ではありません。

トランプ政権のエルサレム併合による「イスラエルの首都」承認。入植活動支援、シリア領ゴラン高原・イスラエル併合承認という歴史と国際法破壊行動に乗じて、ネタニヤフは4月、西岸入植地併合を宣言して選挙に勝利しました。

シオニスト方針が次々と「米の中東政策」と化している現実には歯止めがありません。今後更に、「反イラン同盟」の名でサウジやエジプトを巻き込み、パレスチナの自決・独立の権利を無視した中東和平案（パレスチナ最終解決案）を押しつけようとしています。

すでに2014年にネタニヤフが米・オバマ政権に示した案は明らかにされています。「帰還の権利」もエルサレムの返還も認めず、西岸地区の大部分を併合し、その併合分の代償に、エジプト領のシナイ半島北部をパレスチナ側に割譲させ、西岸のパレスチナ住民の密集地区・ガザ地区及びシナイ半島北部でパレスチナ国を造らせるという内容です。またトランプ・クシュナーらの示した「パレスチナ問題の最終解決構想」は2017春ごろからリークされていましたが、似た内容です。第一にアラブ諸国にパレスチナ難民を同化させ難民の地位を解消させる。第二に西岸地区のパレスチナ自治区を準国家と認めて、ヨルダンとの国家連合とさせる。第三に、西岸全体の61%にあたるC地区をイスラエルに併合する。（註：94年「オスロ合意II」によって西岸全体を区分けした。A地区はパレスチナ自治政府による完全自治区を示し、B地区はパレスチナ自治政府の行政、イスラエル軍による治安警察権、C地区はこれまで通りのイスラエル軍政下を示しており、数年でB、C地区をA地区に編入し自治区を完成させると合意約束されてきた。このC地域は、ヨルダン国境地帯の戦略要所・水資源240箇所以上を数えるユダヤ入植地を擁している。当時から見ると、C地域の入植地とユダヤ人口は増大した。しかし、A地区は当時とほとんどかわらず、今も18%にすぎない。しかもイスラエル軍は必要に応じてA地区に検問所を作り、家宅捜索し、パレスチナ人逮捕を行っている。）

第四にエルサレムはイスラエルの首都とする。パレスチナ準国家の首都はアブ・ディスとし、これを「新エルサレム」とする。（註：アブ・ディス村は東エルサレム郊外の村で、2000年のPLO・アラファト議長が参加した最後のワシントンでの最終的地位交渉で、イスラエル側がパレスチナの首都として示し、アラファト側が拒否し決裂したもの）というものでした。

このトランプ・クシュナー案は、その後もネタニヤフと協議しつつ、サウジやヨルダンに示しながら、最終的な「世紀のディール」「米・中東和平案」へと再編し、近々発表されると大げさにキャンペーンを張っています。そして、中東和平の一部として投資促進の会合を5月に予定しています。

「政治的合意」が進まない中「パレスチナ経済支援」と銘打って、イスラエルのために占領地への投資を促進させる魂胆です。

その一方で、米政府の「新しい中東和平案」では、イスラエルの意向をこれまで通り支援し、「パレスチナ国家」を認めるとしても、西岸ユダヤ入植地はイスラエルの統治下に置かれるとし、パレスチナ側が米の和平案を拒否すれば、次にはすべてのパレスチナへの財政支援を中止するという脅迫も控えています。エジプト、ヨルダンを財政支援で黙らせ、サウジ・イスラエルの反イラン同盟を強化し、パレスチナ自治政府・PLOに対する財政的締め付けをもって、イスラエルの意向を実現させようと迫るでしょう。

歴史をふりかえれば、「パレスチナ問題」は世界の公正と良識を示すバロメーターの位置にあります。かつてはイスラエルの占領・国際法無視を糾弾し、パレスチナを政治的・物質的に支える国が

今よりも多く存在していました。「シオニズムは人種差別主義」と決議した国連総会もありました。今、パレスチナは国際社会の支援を益々必要としながら、かつてよりも国家の支援は弱まり、UNRWAの拠出金も米の凍結の中で厳しい運営を迫られています。

新たなナクバともいえるパレスチナの民族自決・独立の消滅の危機の中、パレスチナの人々は不屈に生存の闘いを闘い続けています。パレスチナ帰還の進行はガザ地区ばかりか西岸地区、ヨルダン・シリア・レバノンのアラブや世界に散らざるを得なかったパレスチナ難民600余万の心を一つに結びつけています。BDS運動は世界各国の支援と連帯を育てています。しかし国際世論も国連決議も国際法も無視したイスラエルは併合を加速させ、2月レヴィ観光相は「更に100万のユダヤ人の入植を短期に実行すべきだ」と主張している有様です。何としてもイスラエルの暴虐と併合を許す訳にはいきません。

リッジ闘争の闘いを共にしたパレスチナのアラブの世界の友人たちの連帯の力を今思い返しています。再び一丸となったパレスチナの解放を願いつつパレスチナの反占領、自決と独立の闘いに連帯します。そして、パーシム奥平、サラハ安田、アハマッド岡本、オリード山田、ユーセフ檜森に敬礼します。彼らの献身・情熱意志を熱く胸に抱きつつ連帯を誓い、この5・30を迎えたいと思います。